

慶応義塾大学名誉博士富田正文君の「『福澤諭吉全集』の編纂校訂註解」
に対する授賞審査要旨

福澤諭吉の著訳全集の編纂は前に二種の福澤全集があつたけれども、何れもその編纂校訂に不備遺漏あることを免れず、今回の全集二十一巻を以て始めてその定本を得たものといふことが出来る。

今その大略をいへば、右全二十一巻中第一乃至第六巻はこれを福澤の公刊著訳にあて、第七巻に未刊行著訳及び覚書、第八乃至第十六巻に、明治十五年の創刊より明治三十四年の福澤の死に至るまでに福澤主宰の時事新報紙上に掲げられた社説、記事、漫録を収め、第十七、第十八両巻を書翰集とし、第十九巻に各種諸文、第二十巻に詩歌、語録及び外交文書の訳稿を掲げ、最終巻たる第二十一巻は福澤の家計及び福澤主宰の時事新報社に関する金銭関係の諸記録、参考資料、補遺、年譜、索引にあてられている。

以上合わせてその量をいへば、福澤自身による著訳の紙数は前後合わせて三〇、九二九枚(四百字詰)、註記解説一、〇三二枚、年譜七五〇枚に上り、更に校訂の厳密、註解の周到深切なる点において編纂者の苦心と努力とは察すべきものがあり、たしかに量質ともに近時の大全集と称するに足るものと認められる。

一例として福澤書簡の集録についていへば福澤の書簡はそこに通計一、九五〇通が収められ、従来報告せられたものに対して新たに七七〇通を加えて(字数においては従来(二倍)いるが、それ等の書簡の受信人は総数四百五十余人に上り、而してその受信者には岩倉、伊藤、井上、大隅等の如き当時著名の政治家もあつたけれども、また反対に

出入りの職人、棟梁や塾の寮生の如き全く無名の人物もあつたから、四百五十余人の大部分の氏名はこれを各種の人名辞書に見出すことの出来ないものであり、その多くの人物についてその経歴と福沢との関係を尋ねる困難はほとんど想像外のものがあると察せられる。編纂者はこれを説明するために註解を加えているが、その註解の字数が略算して本文の十分の一に相当することは編纂者の苦心の凡そどれほどのものであつたかを察せしめると信ずる。更にここには詳説することを省くが、福沢はその書簡に月日を記して殆ど年を記さないのが常であつたから、年代の考定が重要であると共に極めて困難な問題となる。而かもこの考定によつて始めて福沢自身の成長と共にその背景をなす明治日本の変遷というものを、年を追うて迎えることが得らるる次第であるから、この点における編纂の苦心の価値は十分高く評価せらるべきものと思われる。更に、例えば編纂者が福沢が徳川幕府の翻訳官として訳出し、若しくは校正した外交文書を東京大学史料編纂所保管文書の中から検出写記して収録したるが如き、また更に、例えば文久二年（一八六二年）福沢が幕府の使節に随従渡欧した際の手帖の書き入れを解読して、その写真版と共にこれを並記した如き、何れも前人の企て及ばぬところであつて、何れも本全集編纂上特別の用意と編纂者の堅忍苦心を証するものといふことが出来る。

福沢生前の公刊著訳は万延元年（一八六〇年）の「華英通語」に始まり、明治三十四年（一九〇一年）の「福翁百余話」及び「丁丑公論・瘠我慢の説」に終る。その幕末、明治の日本人心に与えた影響は慶応二年に初巻を出した彼の「西洋事情」が発売部数二十五万に上り、また明治五年から同九年に至るまでに第一乃至第十七編を出した「学問のすすめ」の発売部数の前後合わせて三百四十万冊と推算せらるるに由てその一端を窺うことが出来る。同時にま

た福沢は常に新鮮なる感受性を以て時の事物と風潮とに反応する著作者であつたから、その著作は、一方において強く他を照射する発光体であつたと共に、他方諸般の事物の投影を収める多面鏡であつたともいえる。その点においてこの全集はひとり福沢その人のみならず、彼れを載せた時代の日本を伝えるものとして特に格別の史料価値を有するといわねばならぬ。